

いぬがおから



1998 No.132

東京都世田谷区歯科医師会会報



東南アジア旅行の知的楽しみ方

「インド化」された国々へ 遺跡の旅 -IV

下馬部会 斎藤賢一

遺跡の旅Iで寺院建築のあらましを、遺跡の旅II、IIIでは寺院建築に不可欠な彫刻の題材であるインドの神々、インド神話、大叙事詩「ラーマヤナ」のお話をいたしました。今回は御一緒にクメール帝国の寺院を見学したいと思います。クメール帝国(8~12世紀)は現在のカンボジアはもとより、タイ、ラオス、ベトナムをその領土の一部としておりましたので、これらの国にもクメール建築が残っております。それでは、カンボジアのクメール帝国の王都アンコール・トム、現在のシェムリアップへ行きましょう。私が初めて訪れた1998年は、まだ個人旅行が出来ず10日間のツアーに参加しました。まずマニラまで行き一泊して、マニラからホーチミン(サイゴン)に行き、そこでいつ発行されるかわからないカンボジアの観光ビザを待っているあいだにホーチミンの近郊を観光します。私達の場合は4日目に取得できました。すぐ次の日飛行機をチャーターしてプノンペンに行き、空港で入国手続きをしてその飛行機でシェムリアップへ行きました。しかも日帰りですからアンコールワットとバイヨン寺院を見学した時間は4時間だけです。つまり、10日間のツアーでシェムリアップに滞在できたのは4時間だけだということです。しかしシェムリアップの空港からソビエト製のおんぼろバスに揺られて正面にアンコールワットが見えてきたときには体がふるえ、頭の中が真っ白になって、フィルムが入ってないカメラで写真を撮っていました。帰りのバスの中では目頭が熱くなって必ずまた来るからね、と隣のお婆さんと誓い合いました。そして翌年その思いは叶えられました。友人がシェムリアップのグランドホテルに3泊するツアーがあると教えてくれたのです。今でこそシェムリアップには沢山のホテルがありますが当時はグラ

ンドホテル一軒だけで、政情が不安定なので一般には開放していませんでした。ツアーでしたのが色々な寺院を見学できました。さらに一年後、今度は個人旅行でグランドホテルに5泊して自分のスケジュールでゆっくり見学できました。それでは見学を始めましょう。

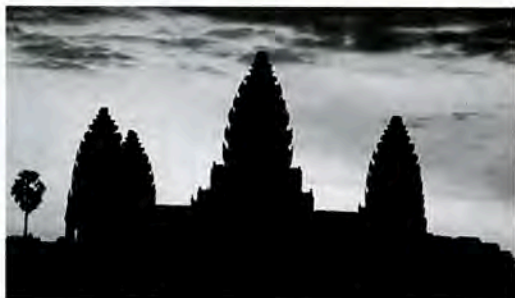


写真-1 「アンコール・ワット」カンボジア

一番初めに行く寺院はもちろんアンコールワットです(写真-1)。参道から建物、彫刻すべてに計算された美しさは最高傑作です。なにより私が好きなのは、いたる所で微笑みかけてくる天女アプサラです。ひとりぼっちで、二人で、三人で、あるいは五人で腕を組んだり手をつないだりしてどこにいても笑顔で道案内をしてくれます。この寺院は珍しく西を正面としていますので、夕方正面から夕日があたり建物がオレンジ色になった時がとても美しく刻々と変化してゆく空の色がたまりません。また日の出もすばらしいのです。まだ暗いうちに参道の正面に座り、ジャングル独特のおもくねっとりした空気に包まれて、蛙の合唱を聴きながら日の出を待つのです。次第に周りが紫色になって、建物の後ろから太陽がでてきます。このとき建物の中に入ると、回廊の連子窓から朝日がさしこみ回廊の床にとっても美しい模様を描き出します(写真-2)。この連子窓は日本の木造建築にも使われて



写真-2 「アンコール・ワット」カンボジア

おり、法隆寺の回廊の連子窓もとてもきれいです。

このアンコールワットに勝るとも劣らないのがバンテイアイ・スレイ寺院です。この寺院へ行くのは大変です。町から40キロほど東北へ行くのですが、治安が悪いので兵士を雇って先導してもらい、見学のあいだは護衛をしてもらわなければなりません。現に私が行った数カ月後にアメリカ人観光客とガイドなど数名が殺されました。赤色砂岩で造られているためバラ色のこの寺院の特徴は深彫りの彫刻が建物全体を埋め尽くしていることです(写真-3)。その彫刻の美しさは言葉には言い尽くせません。



写真-3 「バンテイアイ・スレイ」カンボジア

題材は「ラーマヤナ」、「マハーバーラタ」、神話、神々、など、特に東洋のモナリザといわれる女神デヴァターはあのアンドレ・マルローが盗掘したほどです(写真-4)。アンコールの寺院のほとんどは王が建立したのですがこの寺院は当時絶大な権力を持った王師(バラモン)が個人的に建立したようです。

それからアンコール三山(プノン・バケン、プノン・クロム、プノン・ボック)に登ることをお勧



写真-4 「バンテイアイ・スレイ」カンボジア

めします。アンコール三山と言っても丘に毛が生えたような小山ですが頂上に寺院が建てられています。とくにプノン・バケンアンコールの中心にあり頂上に登りますとこの地方には高い山がないため、遠くまでジャングルが見通せます。そしてすぐそばにアンコール・ワットのシンメトリックな美しい塔が上から眺められます。プノン・クロムは少し離れたトンレサップ湖に面した小山ですがここの頂上も大湖トンレサップが見渡せてピクニックには最適です。その後、湖で舟遊びをするのも良いでしょう。しかしこれらの山の上の寺院も初めは見学できませんでした。なぜなら高い場所はすべて軍の重要な基地でレーダーや大砲が備えられているからです。



写真-5 「バプーオン」カンボジア

アンコールの中心にあるバプーオン寺院は円柱で支えられた参道がとても美しい寺院で「ラーマヤナ」などの彫刻が沢山あります(写真-5)。残念なことに崩壊がひどく現在も修理中だと思います。この寺院のすぐとなりにあるピミア・ナカス寺院はとてもミステリアスな言い伝えのある寺院です(写真-6)。13世紀に中国

(元)から使節に随行した周達観が著した見聞記「真蠟風土記」によると、ピミア・ナカスの塔の中にはこの国の土地主で9の頭をもつ蛇の精がいて、毎晩女の身体をして現れ国王はまずこれと同衾し交接する。そこには王の妻といえどもあえて入らない。国王は二夜目にそこからでるとただちに妻妾と寝ることができるが、もしこの蛇の精が一夜でも現れなければ国王の死期が迫り、また国王が一夜でも行かなければ必ず災禍を得ると書かれています。この寺院は3層の基壇の上に回廊を持った祠堂があります。この祠堂に上がる階段はステップがとっても狭い上に急勾配で登るのにとっても苦勞しました。雑草の生い茂る崩壊のひどい回廊に座ってこの伝説を思い浮かべていたら芭蕉の句がうかんできました。



写真-6 「ピミア・ナカス」カンボジア

その他の寺院ではプラサット・クラバン寺院がレンガ造りで彫刻もレンガに直接ヴィシユヌやラクシュミーが彫られていておもしろい寺院です。私の個人的な意見としてジャヤヴァルマン7世以降の仏教寺院にはあまり魅力的なものがないようです。このころになると砂岩も質の良いものがなくなり彫刻もマンネリ化してきます。それでもやはりバイヨン寺院は特異な寺院です(写真-7)。

二重の回廊に囲まれた円形の中央祠堂とそこに取り付けられた50余りの4面の巨大な顔は観世音菩薩と言われ穏やかな微笑みをたたえています。特に興味深いのは第一回廊に彫られている当時の庶民生活です。市場に並ぶ野菜、魚、肉、酔っぱらい、料理人、泥棒、闘鶏、また貴族の生活、軍隊の行進、戦闘、などが浮き彫りにされています(写真-8)。4面の観世音菩



写真-7 「バイヨン」カンボジア

薩の塔はアンコール・トムの東西南北の門や他のジャヤヴァルマン7世の建立した寺院にも見られます。



写真-8 「バイヨン」カンボジア

タイの東北にもクメール帝国の寺院が沢山あります。ほとんどの旅行者は北のチェンマイや南のビーチへ行って东北部にはほとんど行かないようですが、とても素朴なところで食べ物も美味しく私は大好きです。この東北タイ(イサーン)のカンボジア国境に近いところに沢山の寺院がありますがその中でもパノム・ルン寺院は必見です(写真-9)。この寺院は山の斜面を利用して参道が階段状に作られ山頂に楼門、周壁で囲まれた祠堂があります。ここの見所は破風やまぐさに彫られた「ラーマヤナ」や神話です。



写真-9 「パノム・ルン」タイ

この小山の麓にもうひとつムアン・タム寺院という魅力的な寺院があります。この寺院の彫刻もなかなか良いのですが、ここの魅力は建物の周囲を取り囲むL形をしたナーガ(蛇)の彫刻のある池です(写真-10)。このような平面を持つ寺院はカンボジアにもなくこの寺院を造った人のセンスがしのべれます。



写真-10「ムアン・タム」タイ

ここから少し離れていますがピマイ寺院も忘れてはいけません(写真-11)。この寺院はアンコール・ワットを小型にしたような平面をしており、またアンコールワットを造る直前に建立されているのでおそらくピマイ寺院の成功であるアンコールワットが建立されたのだと思われます。この寺院はヒンドゥー寺院ではなく仏教寺院(密教)です。そのことは碑文にも書いてあり祠堂内部のまぐさに不思議な尊像が彫られています。それにもかかわらず建物の破風やまぐさにはバノム・ルンと同じ「ラーマーヤナ」や神話が見られます。当時の東南アジアの国々では仏教もヒンドゥー教も同じ外来の宗教に変わりはなく、とてもおおらかであったようです。一般にタイのクメール寺院は彫刻にしてもアンコールの寺院とは少し違います。おそらく寺院を造る工房の地方色がでているものと思われます。



写真-11「ピマイ」タイ

ラオスにも興味のある寺院がひとつあります。それは南のチャンバサック地方にひっそりとあります。ここへ行くにはタイのウボン・ラチャタニーから国境を越えて、ラオスのパクセーへ行きそこからメコン川を船で下るか、陸路を車でいきます。少し大変ですがとても楽しい旅になると思います。その寺院はワット・プー寺院といい、このチャンバサック地方はクメール民族発祥の地と考えられており、ここの聖なる山、バサック山の山麓から中腹にかけて建立されています(写真-12)。山麓には崩壊のひどい建物が数棟あり、また新しい寺院もできており僧侶が生活しています。中腹までの階段はかなりきつくハードですが階段の両側に咲いているプリメイラの花の香りが疲れをいやしてくれます。祠堂の前に座り心地よい風に吹かれながら眼下を見おろすと何故この地に寺院を建立したのかわかるような気がします。



写真-12「ワット・プー」ラオス

今回はカンボジアのクメール帝国を中心にタイ、ラオスを見てまわりました。普段ツアーでは行かない場所もありますがそれだけ素朴で、楽しい旅行になると思います。食べ物もシェムリアップではトンレサップ湖の魚がとても美味しくカンボジア風、西洋風、中華風などに調理して食べさせてくれます。東北タイやラオスでは餅米も食べられるでしょう。またあたりまえのことですが野菜が本来の野菜の味がするのです。ラオスでは電気がきていない所が多く、日の出とともに働いて日の入りとともに寝る自然のリズムで生活しており、24時間明るい私達にとってなんと新鮮なことでしょう。自然のくらやみの美しさに感動します。次回は御一緒にインドネシアをまわりたいと思います。